

マルコによる福音書 2章 18節—22節

「2:18 ヨハネの弟子たちとファリサイ派の人々は、断食していた。そこで、人々はイエスのところに来て言った。「ヨハネの弟子たちとファリサイ派の弟子たちは断食しているのに、なぜ、あなたの弟子たちは断食しないのですか。」 02:19 イエスは言われた。「花婿が一緒にいるのに、婚礼の客は断食できるだろうか。花婿と一緒にいるかぎり、断食はできない。 02:20 しかし、花婿が奪い取られる時が来る。その日には、彼らは断食することになる。 02:21 だれも、織りたての布から布切れを取って、古い服に継ぎを当てたりはしない。そんなことをすれば、新しい布切れが古い服を引き裂き、破れはいっそうひどくなる。」

本日はペンテコステです。それで、本日は改めて、私たち自身が今更のごとく新しくされるということについて考えてみたいと思います。

ところで、私の説教は、歌入り観音経よろしく、演歌が入ります。それも一度や二度ならともかく、毎回となると飽きられます。福岡女学院に来た当初は聴衆に受けたのですが、此の頃は鼻についてきたようです。それでも、悲しい性(さが)か、思わず歌ってしまったりするのです。歌ばかりではありません。下品なギャグも入ります。恐ろしい言葉が、畳み掛けられたりも致します。

ある人がこう仰いました。「先生の説教を聞いて笑っている人もいますが、中には困ったものだと思っている人もいますよ。私はそれを心配しています」。何という愛に満ちたお言葉でしょうか。

ところで、「文は人なり」と申します。その伝でゆけば、「説教も人なり」です。私の説教には私の「人」が端的に出ているのです。私の説教が鼻につかれたとしたら、私という人間そのものが飽きられたということです。私の説教が「困ったものだ」と思われるということは、私という人間の存在そのものが「困ったものだ」と思われているということです。私の存在を否定する眼差しの直中に私は生きる

ということになります。

そこで、私はこの新年最初の礼拝でこんな自分を新しくしてくれる聖書の言葉を選んだわけです。

私は生き方を変えねばなりません。新しい革袋にならねばなりません。何故なら、今日、この時、イエス・キリストという新しい葡萄酒を、神様が私という革袋に注ぎ入れて下さるからです。私という革袋は、一新されなければ破れてしまいます。すなわち、私は一新されなければ死にます。私は変わらねばならないのです。変わるか変われないかなどと、悠長なことを言っている暇はないのです。私には、もはや選択肢はありません。変わらなければ、生ける屍となるだけです。だから、私は、「どうせ、こんな私だ」などと開き直すことなく、これまで未開拓の部分に挑みかかからねばなりません。新しい芸風を、いや新しい生き方を求めて進まねばなりません。イエス・キリストは、きっと私を一新してくださいます。今申したことは、もちろんこの場の皆様方にも通じることではないでしょうか。

さて、只今までのお話は、私の芸風をめぐってのお話でしたが、ここで、聖書の言葉をもう少しよく読んでみたいと思います。

本日、お読みしたイエス様のお言葉は、断食という行為をめぐるイエス様とユダヤ教を信じる人々との論争物語の最後の言葉です。マルコによる福音書ではヨハネの弟子達とイエス様との論争となっています。

「2:18ヨハネの弟子たちとファリサイ派の人々は、断食していた。そこで、人々はイエスのところに来て言った。「ヨハネの弟子たちとファリサイ派の弟子たちは断食しているのに、なぜ、あなたの弟子たちは断食しないのですか。」 02:19 イエスは言われた。「花婿と一緒にいるのに、婚礼の客は断食できるだろうか。花婿と一緒にいるかぎり、断食はできない。 02:20 しかし、花婿が奪い取られる時が来る。その日には、彼らは断食することになる。 02:21 だれも、織りたての布から布切れを取って、古い服に継ぎを当てたりはしない。そんなことをすれば、新しい布切れが古い服を引き裂き、破れはいっそうひどくなる。」

花婿とはイエス様のことです。2章 20 節は「しかし、花婿が奪い取られる時が来る。その日には、彼らは断食することになる」と言います。「その日」、すなわちイエス様が殺された日には、そのイエス様の死を嘆き悲しんで断食するというのです。最愛の人を失ったとき、その人を愛していれば、人は悲しみのあまり食事が喉を通りません。必然的に断食状態になるのです。しかし、イエス様が復活されて、いつでも何処でも、信仰者と共に生きてくださることになれば、まさに「花婿と一緒にいる限り断食はできない」ということになるのです。だから、私達クリスチャンは、儀式としての断食をしていません。ただ、イエス様が断食の力を語られたことはあります。「しかし、この種ものは、祈りと断食によらなければ出て行かない」というマタイによる福音書 17 章 21 節ですが、これは、定本にはない言葉で、私達が使っている新共同訳聖書でも最後に一応というかたちで、付け加えられています。

ですから、イエス様の断食という宗教儀式に対する態度は、否定的と言ってよいでしょう。特に本日の箇所では、それが際立っていました。

イエス様は私達に新しい革袋を要求しておられます。イエス様の要求される新しい革袋と何か。それは、見せかけの断食をやめることです。もっと言えば、見せかけを重んじるような、格好ばかりつける生き方をやめることです。見せ掛けだけの親切、見せ掛けだけの優しさ、見せ掛けだけのボランティア、見せ掛けだけの勉強、見せ掛けだけの美しい家族、見せ掛けだけの仲のよい夫婦、見せ掛けだけの涙、見せ掛けだけの笑顔、見せ掛けだけの友情、見せ掛けだけの許し、見せ掛けだけの平和、見せ掛けだけの美しさ、見せ掛けだけの幸福、見せ掛けだけの信仰生活、そして何よりも「見せ掛けだけの一新」をやめること、それが私達の新しい革袋です。

見せ掛けの生き方とは、世間体や見栄を気にする生き方といってもよいのではないのでしょうか。私達は世間体や見栄という綱目から自由でしょうか。五年程前の正月に「忠臣蔵～決断の時」というテレビ番組を観ました。私は兵庫県の小野市で牧師をしていましたから、播州赤穂浪士には親しみを感じはします。

さて、浅野内匠頭の堪忍袋の緒が切れたのは、吉良上野介のいじめが原因です。江戸城の殿中で吉良上野介に斬りつけた浅野内匠頭はご法度を破ったこととなります。しかしご法度では、喧嘩両成敗のはずが、浅野内匠頭だけが即日切腹ということとなります。この理不尽な幕府の裁定が、赤穂浪士の討ち入りを正当化するようにも思えます。

ただ私は、忠臣蔵の中心的問題は、かつてルース・ベネディクトが『菊と刀』という書物で指摘した「恥の文化」としての日本文化の問題だと思えます。とにかく、やたらと世間体を気にするのは。江戸城内でどのように振舞えば恥ずかしくないかを吉良に尋ねざるを得なかった浅野の悲劇は、今尚、私達日本人の悲劇ではないのでしょうか。

最早私達は、神様の前で断食する必要はありません。イエス・キリストは昨日も今日もこれからも、私達一人一人と共におられます。飢え渴いている人がいれば、正にその人は断食的状况にいるわけですが、断食をしてその人の真似事をするよりも、その人の飢え渴きを癒すべく、手を差し伸べればよいのです。自分が少ししか食べ物を持っていないければ、そのような行為は必然的に自分を断食に導きます。即ち自分の食べるものを人にあげると、

自分の食べるものがなくなります。このような本当の断食は、見せ掛けの断食とは比べ物にならない厳しいものです。

最近、私たちは東北大震災で飢えることになってしまった人々を見ました。その意味で、私たちは現実に本当の断食について考えざるを得ない状況におかれました。あの東北大震災という出来事が、私たちの見せ掛けだけの不誠実なものになりがちな生き方を一新するように、新しい自分になるように迫っています。祈ります。

祈り

神様、私達は見せ掛けの生活を改めたいと願います。どうか導いてください。この祈り、主イエス・キリストの皆によって御前におさげいたします。